アブノダイバー

序章

「なあ、林、俺もお前も変態だ・・」
突然目の前に座る森から変態呼ばわりされて、普通なら腹を立てるところであるが、幼い頃から互いの嗜好まで含めて良く知り合う森から口にされたのでは別に腹も立たない。
「ああ・・そうだな・・」と、曖昧に言葉を返した。
落ち着いて考えてみても、常日頃自分で自分の事を変態だと思っているのだが、親友からその事実を客観的に指摘されたに過ぎない。
ここは繁華街に在るチェーンのコーヒーショップ。平日の昼下がりということもあって、店内はわりと空いており、大方は暇つぶしに談笑する奥様方や、仲の良さそうな学生さん達や、一人スマホやパソコンを操作する人くらいで、いい年した男二人が向かい合ってコーヒーを啜り合う姿は、それだけでも充分変態ぽい。
見るからに変人の森には親しく付き合う友達もおらず、俺が唯一の友人であったが、長い間(あいだ)音信が無く、この前久しぶりに「会いたい」と連絡があったのだった。

「なあ、林、今は世の中自体がすっかり変態化してしまったと思わないか？」
自分達の姿が周囲からどのように見られているかも気にならないのか、相変わらず森は頬骨の浮かんだ痩せぎすの顔の奥からギラギラする目で俺の目を覗き込みながらしゃべり立ててくる。
無精髭の浮かんだ顎と、長い間散髪しておらず、朝起きたまま一度も櫛を入れた事のないようなボサボサの髪と、どうでも良いような季節外れの上下の統一感の無い服装も繁華街の人通りの中を歩くには普通の人なら恥ずかしいと感じるだろう。
この一風変わった、もう一人の変態男である森は、俺の幼なじみであり彼の事は良く知っている。
彼は生まれながらの天才なのだ！冗談やお世辞では無く、彼が本気で何かの研究に打ち込めばノーベル賞も夢では無いと信じていた。
東京の国立大学に一発で合格したが、大学生活に幻滅したのか１年程で退学してしまった。

それ以来、学校にも行かず就職もせず、自分の発明品や考案を企業に切り売りして生活しているのだが、それなりの収入はあるようで、生活には困っていないようだ。
彼の頭脳を金儲けに活かせばビル・ゲーツのような億万長者になることも、研究に活かせばノーベル賞も夢では無いと思うのだが、彼は金儲けや名誉などには一切関心が無い。
彼の頭の中に在るのは変態だけなのだ！
「昔だったら官能小説に描写されるような・・今やそれ以上の変態行為が絵空事で無く実際に行われている。むしろ小説の方が現実に遅れているくらいだ・・」
相変わらず熱心に語りかけてくる。
「この間も人気の女性アナウンサーが褌を愛用していることを堂々と公表するぐらいだ。」
流石の森も周囲を気にしてか、話が聞こえないように小声で話しかけてくるが、明らかにそんな現状に苛立っている様子がうかがえた。
「ああ・・彼女可愛いな、俺大ファンだよ・・」
「昔なら、女の褌なんざ羞恥責めのテーマだぜ、それを今は若い女が自分から喜んで身に着けたがる・・」
不満そうな貌を浮かべて、すっかり冷めてしまったコーヒーを一口啜ると、
「それに、美容脱毛だ！アソコの毛をわざわざ金を払って抜いて貰う時代だぜ！アソコの毛を剃り上げるなんざ、官能小説の羞恥責めの定番だ！」
不満をぶつけるように興奮気味に喋り続けた。
「今や官能小説に出てくるような純真で貞淑な女は姿を消して、若い女はみんな盛りの付ついた変態女だ！」
「そこまで言うかね・・」
「幼児愛の男が小学校の教諭になったり、小説にも出来ないぜ。近頃の虐め問題で報道される虐待なども小説の上を行っているぜ・・」
顔を赤く染め昂奮して喋り続ける森に流石の俺も辟易として言葉を濁した。
いくら変態の男同士とは言えど流石に周囲を気にして、大声で会話している訳では無いので、空(す)いている店内で離れて座っている客には話の内容は聞こえていないだろうが、顔を赤くして興奮気味に喋るボサボサ髪の森の姿が奇異に映るのか、時々チラチラとこちらの様子をのぞき見するのが分かった。

「こんな変態化した世の中では俺やお前のような正当的変態は逆に生き辛い。そこで俺は

考えた・・」
「何を？」
「こんな変態が大ぴらになった世界では無く、まだ変態など一部の陰の部分に過ぎなかった、女どもが真から恥じらいを感じていた、正常な世界に行って変態を楽しむ事を・・」
発展の末に文化が紊乱した今の日本では無く、世界にはまだ純朴さを残す国は多い。そのような国の純真な女を相手に変態行為をする事を森は考えているのかと想像した。
しかし、変態行為は外国でも忌避され、官憲に捕まった場合日本よりも重罪になる国は多く、その分リスクも高い・・

「そこで俺は考えた。」
「何を？」
同じ言葉を何度も繰り返すので、イラっとして俺も同じ質問を繰り返した。
「俺の持てる頭脳を精一杯使って、考えて考えて考え抜いた・・時には脳に血が上り過ぎて意識を失うことも何度か在った・・その結果、遂に俺は作り上げた・・」
「だから何を？」
森の口がボソッと動いた。
「*何！？タイムマシーンだぁ～～～！？*」
俺の驚いた声が店内に響き渡った。
店内の客が批難するように俺達の方をジロッと見つめた。
この天才は変態行為を為(し)たいがためだけに、タイムマシーンを作り上げたと言うのか？
昔から彼の並外れた頭脳を知っている俺でも俄(にわか)には信じ難い！

「今良い物を見せてやる。」
と、言うと懐からスマホを取り出して、俺の方に差し出した。
「俺は出来たばかりのタイムマシーンに乗って、さるやんごとなき姫の館に忍び込み隠しカメラを仕掛けてきた・・」
スマホの液晶画面を操りながら喋り続けた。
「ほら見てみろ・・」
スマホを俺に向けた。
其処に映ったのは古風な広い日本風の建物の内部の様であるが床には畳が敷かれておらず、

一面の板張りであった。室内の造りは充分手の込んだ物であり、安い制作費の映画では出来ないセットだと思われた。
その部屋の中央には一双の屏風が立てられ、屏風の前には黒い漆塗りの箱が置かれていた。
その時奥の襖が開いて、一人の女が部屋の中に入って来た。
歳の頃は二十歳前であろうか・・十二単と言うのだろうか、艶やかな色彩の着物を何枚も重ね着しており、平安時代の絵巻に登場するような高貴な身分の女性を感じさせた。
ふっくらとした頬を持つ瓜実顔の女の白く塗られた顔には丸い眉が描かれ、唇には赤い紅が引かれていた。近頃の若い女には先ず見られない古風な顔立ちであるが、それなりに美しい女だと感じた。その女が誰だか日頃映像でお世話になっているポルノ女優やグラビアアイドルの顔を思い描いたが、全く当てはまる女は思い浮かばなかった。そこから発せられる典雅なオーラは、近頃の尻軽の若い女とは全く別物であった。
女は漆塗りの箱の前に進み出た。箱の蓋は既に開けられていた。
次の瞬間俺の目はスマホの小さな液晶画面に釘付けとなった。
この平安貴族風の典雅な女は両手で着物の裾をスルスルと捲り上げ始めたのだ。
重ね着した着物の裾を大きく広げたので、むっちりとした白い大腿がしだいに露わになっていった。
更に着物を捲り上げたので双臀が丸出しとなり露出した股の間に濃密に繁った春草が出現した。
女はそのまま股を大きく割って黒塗りの箱を跨ぐと、カメラに向かって股間を開いて箱に向かって腰を降ろした。
漆塗りの箱の上で蹲踞する女に向かってカメラがズームして開け広げられた股間の一点に集中した。
一瞬露出が合わず画面が暗くなったが、直ぐに露出調整され、開け広げられた白い大腿と毛黒い茂みが明瞭に映るようになった。
濃密な繁茂の陰から色素の沈着の無い鮮やかなピンク色の女性器がチラチラと見え隠れする。
近頃の AV 女優なら下の毛の手入れはきちんとやっているものだが、この女は伸び放題のまるでジャングルの様に縮れ乱れた下草をデルタ状に生やしていたが、逆に新鮮に映った。
女の息む様な声が漏れ、箱の上に屈んだ腰が一瞬ブルッと震えた。
この黒い漆塗りの箱は‘おまる’で、これから排便をするところなのだと理解出来た。

昔平安貴族の邸宅には便所が無く、貴族は部屋の中で用便をして、使用人がそれを始末していたと聞いたことがあるが、それを再現したものだと理解した。
それにしても古風な建物の内部や、雅な衣装やアダルトビデオにしては随分と金を掛けた演出だと驚かされた。
俺は魅入られたように小さなスマホの液晶画面を注視し続けた。
正面に大写しになった秘園の裏側の肛門の様子は判らなかったが、息んでいた女の口から空気の抜ける様な声が漏れた。
そして、濃密な陰毛の奥に突き出した紅い肛門の端が垣間見え、その管の先から茶色い便塊がニュッと出現した。
肉付きの良い女の腰がブルブルと震えていた。一旦飛び出した便塊は一本の太くて長い塊となって股間から垂れ下がり、プチリと切れて漆塗りの箱の中にポトリと落下した。
それで堰が切れたように、その後、大量の便が腸内より流れ出し漆塗りの箱の中に蜷局を巻いて行った。
俺は目を見張って、液晶画面に映る若い女の脱糞姿を見続けた。
そんな俺の様子を満足そうに森が眺めていた。
「どうだ、面白いか？」
「ああ・・未発表の新作アダルトビデオか？それにしても良く出来ているな！」
「その糞を垂れている女が誰か分るか？」
森が意味深な笑みを浮かべて尋ねて来た。
「さあ？・・」
俺の知っているＡＶ女優の中にはいない女だったので曖昧に返事した。
「ソイツはな・・」
口元に卑猥な笑みを浮かべてボソッと呟くように口にした。

「*何！清少納言のスカトロだとぉ～～！～～～～！*」

俺の驚きの声が静かな店内に響き渡った。
店の中の客や店員が唖然とした貌で俺達の方を見た。
人目を憚らない変態男であっても流石にそれ以上店には居られなくなって俺たちはそそくさと店を後にした。

通りを連れだって歩き、興奮して一方的にしゃべる森の話を聞きながら、森の自宅に向かう事になった。
市の郊外にある新興住宅街に建つ何の変哲も無い小さな一軒家が森の家だった。
森の両親は既に他界しており、一人暮らしでろくに掃除もしないのだろう、玄関を開けると直ぐに堆(うずたか)く積み上げられたゴミの山が目に映った。
「いつ来てもゴミ屋敷だな・・」
森に案内されるままに両側に屹立つゴミの山を掻き分け、足元のゴミを跨ぎながら奥に進んだ。
「これだ・・」
森が何かの設備を指し示した。
以前はリビングに使っていた部屋であったが、天井は外され剥き出しとなった部屋の中にそれは在った！
それは鉄やアルミや銅みたいな金属を組み合わせて作った球形の檻のような形をしており格子の周囲にはケーブルが幾つも巻かれていた。
昔の小学校の校庭や広場に在った回転遊具の様な形をした直径３メートル程の球形の金属製の格子から何本ものケーブルが伸びて何かの機械に繋がっていた。
その機械の上にはコンピュータが置かれ、液晶ディスプレーは電源が点いたままであった。

「これで女がまだ変態化されていない純真で恥じらいを持っていた頃に戻って思い切り変態を楽しもう！それに過去に遡れば何をやっても全て時効だから警察に捕まる心配が無い！」
笑いながらそう口にすると、装置の横にあったゴミの様な物を掻き分け、何やらビニールで出来たような艶々したツナギの服を取り出した。
「一応、時間を旅するタイムダイバーだから、それらしい恰好をしないとな・・お前の分も作っておいた。」
光沢のある銀色の地に赤や青のストライプがデザインされた服を俺の方に拡げて差し出した。
「カッコいいじゃ無いか！それを着ると漫画の強化服みたいに力が倍増されるのか？」
「そんなに力は増幅される訳では無いが、ナイフやピストルの弾を通さない位の強靭性は持っている。」

森の指導を受けながら着替えた。森もさっきまでのだらしない服を脱ぎ捨て着替えたので、まるでSF映画に出て来る未来の宇宙服を着た主人公の様な格好の二人が揃った。
「さて、何処に行こうかな？美人でもただか弱い女を犯してもつまらないな・・貞淑だが強い女を無理やり犯すのが面白いな・・そうだ！あそこに行ってみよう」
俺の意見も聞かず、傍らのコンソールの上に置かれたコンピュータのキーボードをカチャカチャと操作すると、俺の背を押して球形の格子の中に押し込んだ。
「おいおい！一体何が始まるんだ？」
狭い球形の空間に二人で並んで立つと流石に不安が込み上げて来てたずねた。
森は俺の問い掛けも耳に入らない様に、手にしたリモコンのような機械を操作していた。
周囲を取り囲んでいた球形の構造物がゆっくりと回り始め、やがて風を切るような甲高い音を発して高速で回転し始めた。
それと共に自分達の足元も頭上も周囲が眩(まばゆ)く輝き始めた。
不意にフワリと身体が浮き上がるような感覚に落ちた。それは重力が無くなったと言うより、何か今までいた次元から切り離されたような感じであった。
虹の様にキラキラと輝くまるで靄の様なネットリとした光が全身を包み込むのを感じながら意識が遠退いて行った。

1183年　宇治川

木曽義仲追討の院宣を受けた源頼朝の命を受け範頼・義経の鎌倉勢が宇治川の東岸に陣取っていた。
京都に鎌倉勢を一歩も入れない―と、対岸には義仲の軍勢が対峙していた。
瀬田の唐橋を落としていたので、鎌倉勢が進軍するには流れの速い宇治川を泳ぎ渡るしか無かった。
後は上陸して来る敵軍を逐次撃破して行けば良い―義仲には勝算があった。
岸辺に対峙する軍勢を従え義仲と巴御前が陣頭に馬を進めていた。
「巴！いよいよ戦が始まるぞ！楽しみじゃのう！」
と、傍らに控える巴の方を振り返って興奮した声を上げた。
馬上に控える巴の姿をじっと見つめながら、今日の巴は何時もに増して美しいと感じた。

華美な彩色の施された華麗な鎧を身に纏い、細面の色白の顔面の額部分には黒光りする鉢金を巻き、黒くて長い髪を後ろに束ねたこの若い女武将は修羅場を目前に控えた緊張感で目はカッと見開き引き締まった表情を浮かべているが、その凛と引き締まった容姿を見詰めていると、逆に今すぐにでも鎧を剥ぎ取り己の肉塊を埋めて見たい肉欲も昂じて来るのであった。
戦を前にした興奮と愛しい女をじっとみつめる熱い視線を肌身に感じながら、この戦に関しては部類の才能を持つ男は、心から合戦を楽しんでいるのだ―と、まるで子供がオモチャを前にしてワクワクするように心を昂らせている男を見詰めて、頼もしいと感じると伴にまるで駄々っ子を見るような可愛らしさも感じて、じっと愛(いと)しい義仲の背中を見詰め続けた。
「おお！敵が川を渡り始めたぞ！いよいよ始まるぞ！」
興奮した声を発して、再び巴の方を振り返った。
「・・・！！」
思わず、義仲が驚き、声を失った。
さっきまで馬上に在った巴が乗馬だけ残して忽然と姿を消していたのだ！
「巴！巴！何処に行ったのじゃ！」
最愛の女であるだけでなく幾多の戦も共に戦い最も頼りにする戦友でもある烈女の衆人に囲まれた中での突然の失踪というあり得ない事態に周章狼狽する義仲に最早軍を統率する能力は喪失していた。
鎌倉勢が次々と川を渡り始め、上陸し始めていた・・

フッと意識を取り戻した巴は異様な状況に驚愕した。
目を開くと広い青空が見えた。さっきまで愛馬に跨り義仲の傍に控えていた自分が何故か河原の上に仰向けに横たわっていることが分かった。
遠くからは喚声と刀を撃ち交わす音が木霊しており、戦は既に始まっており自分は合戦場からそれほど遠くに居ない事は理解出来た。
しかし、さっきまで馬上に居たはずなのに何故一人でここに横たわっているのか理解でず頭を激しく振り目を瞬かせた。
目を激しく左右に動かすと、身体の線が表れる様な艶々と輝る銀色の服に全身を覆われている二人の男が陰湿な笑みを浮かべて見下ろしているのに気付いた。

その二人の姿は味方の木曾勢や敵方の鎌倉勢やこの時代の人間の姿とも明らかに違っていた。
「此処は？！」と、口にして身を起した巴に、興奮した林が「そんな事はどうでも良い。これから楽しもうぜ！」と叫んで抱き着いた。
「無礼者！」と林の身体を掴むと河原に投げつけた。
「痛てて・・くそコイツ女のくせに何て馬鹿力だ！」
巴の足元に倒れる林が強(したた)か打ち付けた腰を押えて忌々し気に口にした。
「其方、鎌倉の手の者か！？」と、腰の刀に手を掛けた。
その時、森が背後からスタンガンを押し当てた。
瞬間強烈な電撃を受けてグワッと低い悲鳴を上げて身体を仰け反らした。
「ふふ・・全身金属の鎧に包まれているから良く効くぜ・・」
森がスタンガンを握ったまま薄ら笑いを浮かべた。
「俺の自家製のスタンガンだ！神経が麻痺してしばらくは身動きできないぜ・・」
森が嘯(うそぶ)く通り神経が麻痺して全身が弛緩し全く身体を動かすことが出来ない様だ。
二人は歓声を上げながら鎧を止めている紐に指を掛け、何本もの紐を解き、次々と甲冑を剥ぎ取って行った。
身体は力を失い弛緩したままだが、意識だけは戻り始め、激烈な刺激を感じた記憶は残っていた。まだ癒えぬその強烈な刺激のため体中が痺れて身体を動かす機能が麻痺している現実を思い知らされた。
何が起きているか理解できない巴にとって驚愕の目を左右させて、男達の狼藉を目で追うしか無かった。
身動きできない女の着ているものを剥がそうという男達に憤怒の目の色を浮かべた。声を出す機能はまだ失われており、男達の作業を見守りながら痺れて動かない身体にもどかしさを感じた。
男達は巴の身体からすっかり鎧を剥ぎ取り、若い女性らしい山桜色の小袖姿に向き上げた。
薄い布地を通して身体の線が浮かび上がっていた。
厚い鎧に覆われていた蒸れた体から汗の匂いと共に得も言われぬ女の体臭が込み上げていた。
林が鼻息を荒げて、乳房を剥き出しにしようと着物の襟に両手を掛けた。
その時残されていた力を振り絞り武者ぶりつく林の身体を突き放した。

再び巴に投げられて、腰を摩りながら「痛てて・・電撃のショックが切れて来た様だな・・」と、忌々し気に声を上げた。
まだ体の痺れは残っている様で、巴から突き放されても大きな痛みは感じていなかったが、投げられた恨みを返す様に、スタンガンを握り締めると、剥き出しとなった素肌に押し当てた。
グワッと悲鳴を上げると雷に打たれたような衝撃を感じて河原の上を転げた。
河原にうつ伏せに横たわり、荒い息を吐くだけで再び身動きできなくなった巴を見下ろしながら、「今のうちに素っ裸に剥いで、縛り上げてしまおう！」と剥き出しとなった小袖に手を掛けた。
身体を動かす機能も声を上げる機能も喪失していたが、意識だけは戻り始めた巴は男達から着物を剥ぎ取られて行きながら、目には羞恥と絶望感が浮かび始めていた。
「コイツ男勝りの女のくせに大きなオッパイを持っているじゃないか！」
着物を剥ぎ取り上半身を剥き出しにさせた林が歓声を上げた。
無駄肉の無い色白の引き締まった体をしていたが、大きな乳房を持っていた。
「何時も義仲から揉み上げられ大きくなったんだろう！」
自分ばかりか愛しい義仲まで愚弄されたと感じ、一瞬目に怒りの色が走った。
「それにしては、乳首は綺麗だぜ！あまり使い込まれて無いようだ・・」
林が薄いピンク色の乳首を指先でコリコリと揉みながら口にした。
男の指先を素肌に感じてゾッとするものが込み上げて来た。
「今のうちに縛り上げてしまおうぜ！」と一緒に持って来た荷物の中から麻縄の束を取り出した。
筋肉の弛緩した上体を二人で支えながら、両手を後ろにねじ曲げ厳重に高手小手に縛り上げ、残った縄を前に廻して豊満な乳房の上下に二重三重に巻き付けた。更に首から降ろした縄で乳房の下を通る縄に絡げてグッと上に引き絞り、乳房の左右で上下を通る縄に閂を施したので、豊かな胸は荒くれた麻縄で縊り上げられ、これ見よがしに前に突き出していた。
今や巴は下腹に僅かに短い腰巻を残すだけで、白い身体に黒ずんだ麻縄を纏った姿で河原に腰を落としていた。
縄止めを済ますと二人は前に回って出来栄えを鑑賞した。
「やはり麻縄で縛り上げた女の姿は良いもんだ・・」

「昔の女には麻縄が良く似合う・・それにそこはかとない色っぽさがある。髪の毛を金色に染めた今の女を縛るのとは段違いだ・・」

「それじゃ早速腰の邪魔な布切れを取ってしまおう！」
美女の裸体鑑賞に満足した二人は腰の周りに巻いた丈の短い腰巻に手を掛けた。
その頃巴も激しい電気ショックから回復し始め、肌の感覚も戻り始めていた。
柔らかな下腹の肌の上で熱い男の手が動き回るのが知覚出来るようになって来た。
男の手で腰に巻いていた布が剥ぎ取られ、股間に冷たい風が入るのを感じた。
愛する義仲にしか見せたことの無い自分の体の秘めた部分が陽光に晒され、羞恥心が込み上げて来て、肌が赤く火照って行くのを感じた。
「ウヒョー！これが巴御前の股ぐらか！毛がモジャモジャじゃ無いか！」
巴の身体から腰巻を奪い去って、あからさまにさらけ出された股間の様子を目にして歓声が上がった。
「お前達は何者です！？これ以上の無礼は許しません！直ぐに縄を解くのです！」
やっと声を上げることが出来るようになり悲鳴の様な金切り声を発した。
露わになった股間をきつく閉じ、憤怒と羞恥の表情を浮かべていた。
「意識が完全に戻って来た様だな？　俺達が何者か話してもたぶん理解できないだろう・・ただ俺達はお前の事を殺したり傷付けたりしようと思ってはいない。これから少しの間お前と一緒に楽しい遊びをしようと言うだけだ・・」
森の不敵な言葉に巴の目に怯えた光が差した。
「これ以上妾(わらわ)に無礼な事は許しません！妾は死・・」
必死に頭を振って此処まで口にした時に、突然グワッと呻き声を上げて身体を痙攣させた。
森が再びスタンガンを押し当てたのだった。
電撃のショックで河原に倒れ伏し身体をピクピク痙攣させる巴の口を押し広げた。
「舌を噛まれて死なれたら元も子もないからな・・猿轡を噛ませてもらうぜ！」
ショックで蒼白となる巴の口をこじ開けると、巨大な赤いボールを持ったボールギャグをねじ込んだ。顎を精一杯開かせて無理やり口の中に硬質樹脂のボールをねじ込むと、ボールから延びた革ベルトを頭の後で固定した。
森から無理やり異物を噛まされながら目を白黒させる巴が居た。
「電撃の出力を弱くしておいたから直ぐに身体を動かせるようになるだろう・・」

「しかし、平安時代の女にボールギャグを噛ませるなど何か猟奇的だな！」
口を精一杯拡張し赤いボールを頬張る瓜実顔の巴の顔面に二人は魅入った。
巴の目が恐怖で見開き男達を見ていた。
ボールをねじ込まれた口の端からは涎が滴り落ちていた。

身体を折って乳房や股間を隠されない様に、ポツンと在った大石まで二人掛で引きずり上体を縛り付けた。
これで河原に尻を着いたまま上半身はがっしりと固定され身動きが封じられた。
まともに格闘すれば並みに男など蹴散らす自信はあったが、自分がこの男達に対して何も抵抗できない口惜しさと今の自分が置かれている惨めさに目に涙を潤ませた。
「何も恐れることは無い・・これから俺達と面白い遊びをするだけだ・・」と、言うと顔を巴の顔に近付け、舌を伸ばしてボールと唇の間に浮かんだ唾を舌先で拭い取った。
瞬間巴は唇を奪われたような感触に襲われ、声にならない悲鳴を上げて身体をビクッと硬化させた。

男達の淫らな視線を身体に浴びながら必死に身体を硬化させ、股間を硬く閉じ最後の部分を必死に隠そうとする巴に、「さあ、これから股を開いて肝心な部分を見せてもらおうか・・」と、淫靡な笑みを浮かべて冷たく命令した。
男勝りの怪力を誇る巴であったが、男二人で足首を掴んで左右に引っ張れば股を開かせる事は可能かと思われたが、このような烈女に力づくで挑んでも面白くない。自分で股を開いて男の目に晒す様に仕向けたい―森は自ら股間を開いて秘裂を晒すよう命じたのだった。
絶望的な状況で巴はイヤイヤと首を振った。
「嫌かい？でも君は嫌でも股間を晒すことになるよ・・」
手にしたスタンガンを見せつけるように巴に示した。
1000 年近く前に生きた巴にはそれが何か全く理解できなかったが、何度も身体に押し当てられた経験から恐ろしい刺激と苦痛を与えるものであることは身体に教え込まれていた。
森の手にするスタンガンの電極からは青白い火花がバチバチと飛んでいた。
巴にはこの二人が地上に降り立った雷神では無いかと恐怖した。
「出力を弱めておいたから、もう意識を失うことは無い・・だけどその分激痛が走るよ・・」スタンガンを握ったまま冷たい笑みを浮かべた。

「ほうら」と、一言口にすると剥き出しの乳首に電極を押し当てた。
ギャッと悲鳴が上がり身体を硬化させた。
「どうだい？気を失う事が出来ないので、代わりに激痛が走るのが分ったろう？」
堪え難い苦痛を乳首に受けて、身体にビッショリ汗を浮かべ荒い息で肩を上下させる巴を冷たく見下ろしながら、「股を開いて俺達にオ[redacted]を見せつける気になったかい？」と、優しい口調で問い掛けた。
其処には義仲と共に戦場を駆け巡り敵を蹴散らした烈女の面影は消え去り、電撃の恐怖にブルブルと身を震わす敗北感に苛まれ涙を流す哀れな女の姿しか無かった。
「さあ、股を開くんだ！」
この期に及んでもこの得体の知れない男の前で秘奥を晒す羞恥に堪えかねて、弱々しく首を振った。
「全く仕方ない奴だな・・」
頑なな巴の姿を冷徹な目で見詰めながら、無言でもう片方の乳首にスタンガンを押し当てた。
激烈な電撃にギャー！と喉の奥から悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。
恐怖の色を目に浮かべ自分の方を気弱に見詰める巴には最早抵抗の気力は無くなっていると読み取った。
「さあ、股を開くんだ・・」
バチバチと火花を散らす電極をゆるゆると臍の方に向けて行った。
目に涙を一杯に浮かべ、ボールギャグの下で何か呻き声を上げながら拒否するように頭を激しく振った。そしてジワジワと固く閉じられていた股間を開き始めた。
「おお！開き始めたぞ！」
男達の暴力の前に敗れ去り開城し始めた様子に声が上がった。
二人は生唾を呑み込みながらその様子をじっと見つめていた。
濃密な繁茂の下からまるで熟れた桃を割った様な柔らかな肉置きの肉丘が見え始めた。
「さあ！いよいよ巴御前の秘仏の御開帳だ！」
林のはしゃぎ声に一瞬羞恥心が蘇りビクッと股間を閉じようとした。
「何をしているんだ！早く股をおっぴろげるんだ！」
スタンガンを目の前に見せ付けながら命じた。
堪え難い電撃の苦痛への恐怖心に負けて再びおずおずと開き始めた。

「おお！見えて来た！見えて来たぞ！」
目の前に現れ始めた美女の秘奥の様子を股間に顔を突っこむ様にして覗き込んだ。
其処には羞恥と興奮に赤く充血した秘唇が在った。
正体不明の男達に秘奥を晒す羞恥と恐怖心に股間を大きく広げたままブルブルと身体を震わせていた。
「まだ見えんぞ！もっと大きく開くのだ！」
既に股間は既に大きく開き、開け放たれた中心部分には女の命が宿る場所が陽光に明々と照らされていたが、更に巴の羞恥心を煽るように過酷な命令をした。
森の言葉に逆らえず、涙をしゃくり上げながら、自分の力で開く限界まで股間を開いた。
男達の目の前で大の字開きとなった巴の姿を暫く満足気に鑑賞していた森達だったが、別の縄を手にすると左右の足首に縛り始めた。この後巴が羞恥の余り再び股間を閉じない様に股を開いたまま固定しようとの算段であった。
両足首を縛った縄を後ろに廻し、大石の背後で固定した。
更に脛や太腿にも縄を掛け、大石に背中を預ける形のままM字開脚に縛り上げてしまった。
改めて恥ずかしい部分を隠す能力を失った巴の股間に鼻先を近付けてその部分を観察した。

「臭(くさ)～！」

林が女性器から立ち昇る異臭を嗅いで大声を上げた。
「今の時代の女と違って毎日入浴しないし、石鹸で其処を洗う事も無いから臭くて当たり前だ！もっとも俺はそんな匂いも好きだがな」
と、曝け出された秘園に鼻先を突き出し香(かぐわ)しい匂いを嗅ぐように鼻を蠢かせた。
そんな森の様子に、コイツは本物の変態だ！と感心した。

顔を股間に突っ込んだまま M 字開脚され隠す物の無くなった秘奥を更に露出させるよう指先で春草を左右に押し分けた。
濃密な縮れ毛の間から赤く充血した秘肉が現われた。
「フーム、まだそんなに使い込まれていないようだな？綺麗な物だ・・・だけどこの毛が邪魔だな・・」
シャリシャリする縮れ毛を指先で摘まんだり撫で上げたりしながら呟いた。
「剃っちゃえ！剃っちゃえ！」

森の独り言に林がはしゃいだ声を上げた。

シェーバーを手にして開け放たれた股間に迫った。
その手にする道具が再び激痛を与えるものでは無いか？と恐怖した巴が縛り上げられた身体を硬直させた。
巴の身体は今はテーブルの様に平らな大石の頂上に後手に縛った背を載せる形で、剃り良いように股間を大開きの形で縛り直されていた。石の上と背中の間にクッションが敷かれていたのは男達の少しばかりの優しさだった。
シェーバーが股間に押し当てられた時、巴は観念して硬く目を閉ざした。
予想に反して、その道具から激痛を発する事は無かった。
ただジーと言う音と振動が秘裂に不思議な感触を与えた。
大石の背に仰向けにきつく縛り上げられて身体を全く動かせない状態だったが、頭を上げて男達の作業を見詰めた。
成長した女の象徴として豊かに生い茂っていた下草が、男の手にする道具が肌の上を左右する度に失われて行った。
木曽義仲の最も信頼する女武者として周囲の信頼と忠誠を一身に集めていた自分をかくも愚弄する男達に怒りを覚え、まるで童女のその部分の様にむき上げられていく恥ずかしさも込み上げて来た。
そんな怒りと敗北感と羞恥が綯交ぜになった心の内にシェーバーの電動音と振動が不思議な感覚を植えて行った。

「そら出来たぞ！」
秘裂からシェーバーを除かして、明るい声を上げた。
「ツルツル、ピカピカで綺麗なモンじゃないか！」
剃り跡の青々した秘丘を目にしてはしゃいだ声が上がった。
「どうだ？お前も見てみるか？」と、鏡を手にしてそこの様子を巴に見せ付けた。
一瞬綺麗に剃毛され一切の飾り毛を喪失した自分のその部分を目にしたが、見てはならないモノを見たと顔を伏せた。
「おや？お前随分とデカいクリトリスを持っているじゃ無いか！」
「流石は荒くれ武将を従えて来た男勝りの女だけはあるぜ！」

二人は幼児の男根のような陰核を指さしてゲラゲラ笑い声を上げた。
「ここのデカい女は感度が悪いって言うがどうかな？」
指先を伸ばして突然陰核を摘まみ上げた。
ヒィ！と、うめき声を発して身体を硬化させた。
「中々感度が良さそうじゃ無いか？お前馬に跨って揺られている時、コイツが馬の背に擦られて、一人でよがっていたんじゃないか？」と、笑い声を上げた。
愛する義仲でさえ閨の中でめったに触れて来たことの無い雌芯を嫌らしい指使いで弄ばれイヤイヤと首を左右に振り続けた。
陰核をいじり立てながら根元を覆っていた包皮をむき上げ、亀頭部のような形をした先端を露出させた。
綺麗なピンク色をした宝石の様な部分をしばし見詰めた後、
「お前はさっき股を広げろと命令した時、さっさと拡げなかったな・・これからその罰を受けるんだ。これからは僕達の命令には直ぐに服従するんだぜ・・」
と、冷たく言い放つと巴の目の前にスタンガンを見せつけた。先端の電極からはバチバチと火花が散っていた。
森はスタンガンを手にしたまま首から乳房のあいだ、鳩尾(みぞおち)から臍周り、下腹へとスタンガンを握る手を滑らせていった。
開け放たれた股間の上で手の動きが止まった時、巴は森の狙いに気付いて全てを諦め瞼を硬く閉じた。
森の手にするスタンガンの電極は過たず剥き出しとなったクリトリスに押し当てられた。
ギャー！と猿轡で封じられた喉の奥から悲鳴が上がれ、大石の上で巴の身体が何度も飛び跳ねた。森はスタンガンを陰核に押し当てたまま数秒間に渡って電流を注ぎ続けた。
堪え難い苦痛により巴の身体は石の上で何度も飛び跳ね、最後は白目をむいてボールギャグを噛まされた隙間からは泡が流れ出た。
電撃の刺激は膀胱を著しく緊縮させ、秘奥から一条の激しい放水が始まった。
黄色味を帯びた水は２メートル程飛び放物線を描いて地面をビシャビシャと濡らした。
男達の嘲り笑いを耳にしながら巴の意識は薄れて行った。

ふと生暖かい液体を顔に感じて巴の意識が戻り始めた。
薄っすらと目を開けると、大石の上に仰向けに横たわる巴の顔の左右に立つ男達が服の股

の間から男根を突き出し、顔を目掛けて小便を掛けていたのだった！
驚いて見開いた眼にまともに黄色い汚水が流れ込み、強い刺激が目に沁みて顔を左右に激しく振り立て呻き声を上げた。
後ろに束ねた長い黒髪が男達の生暖かい小水で濡れて行くのが分かった。
歴史に残る烈女を便器扱いする征服感に酔いながら、「おや？気が付いたかい？今度から僕たちの命令に逆らった駄目だよ」と、優しい声を出した。
木曽義仲の軍の中に在り女武将として畏敬の念を集めていた自分がこんなにも惨めな扱いを受けている現実に晒されると、これまで築き上げて来たプライドがガラガラと崩れ落ち、踏みにじられるのを感じて嗚咽した。
「泣かなくても良いじゃ無いか。これから三人で遊べばきっと楽しい気持ちになるよ」
と、口にすると白色の巨大なバイブレーターを手に取った。
沁みる目を見開いてバイブレーターを見詰めたがそれが何かは判らなかった。ただ男性器を模した形から女体を責める為の淫具であることは理解出来た。
スィッチをいれるとブーンと不気味な音を発して淫靡に蠢き始めた。
そのまるで命を持っているかの様にクネクネ蠢く棒状の物体を目にして巴の頬が赤く染まり始めた。
その太さや長さは恋しい義仲のモノより遥かに大きかった。
義仲しか男を知らない巴にとって義仲の男が果たして世間一般と比べて大きいのか小さいのか判らなかったが、義仲のモノに慣らされた自分にそのような巨大なモノが突きたてられたら壊れてしまうのではないかと恐怖した。
怯えた色を目に浮かべる巴を無視して、森は鼻歌を歌いながらバイブの先を縄に縊り上げられた乳房に押し当ててマッサージしたり、臍の窪みに押し当てて悲鳴を上げさせるなどの悪さをした。
そして、身体の中心線をなぞって柔らかな下腹を先端で愛撫した。
最早その気味の悪い音と動きをする淫具が男達の目指す淫門まで後僅かであることを自覚した。
厳重に縛り上げられ股間を剥き出しにされ、猿轡までされて自害も封じられた今の自分には、最早どうにもならないと覚悟すると、
「ああ・・義仲様！お許しください！」
と、ボールギャグの下で声にならない声を上げて愛しい義仲に心の中で詫びた。

ところが、巴が悲しい覚悟を決めた瞬間、バイブはフッと中心を逸れて開け広げられた太股を擽った。
雌穴への侵入を免れてホッとした巴であったが、森は巧みな道具使いで右に左に秘園の傍の太股を刺激し、繊細な女の神経が通る部分を執拗に責め上げた。
これに呼応するように、林も両手で縄に縊り上げられ前に突き出した乳房を握り締め、せっせと揉み上げ、先端の乳首を交互に舌先で転がした。
乳房を責める林と下腿を責める森の動きが巴の中で一つに繋がり、奇妙な感情が沸き上がりつつあった。
義仲により女の喜びを教え込まれた肉体は、異常な状況下にあってもそれを不思議な快美感として捉え始めていた。
大石に固定された全身を紅潮させ、興奮に鼻を膨らませて忙しない息を吐く巴の姿を見て感じ始めている事が分った。
左右の乳房を半分ほど口の中に含み、興奮にシコリ始めた乳首を口の中で舌先で転がした。
森もバイブの先端で下半身の快感ゾーンを責め立てた。
「ああ・・早く欲しい・・それが欲しい・・」
今まで義仲に心の中で詫び続けていた巴であったが、成熟した女の本性はそれを裏切るように悪魔の囁きを始めていた。
すっかり剃毛され剥き出しとなった秘園がじっとりと湿り気を帯びて来たことが分かった。
突然巴がビクッと身体を蠢かせた。
森が指先を濡れそぼつ肉穴に埋没させたのだった。
「随分濡れているじゃ無いか・・早くこれが欲しいんだろ？」
雌穴を責め立てられながら否定するように激しく顔を左右に振った。
「嘘を言っても駄目だよ、こんなに濡れているじゃ無いか・・」
愛液が塗され濡れ光る指を巴の目の前に突き出した。
一本の指を二本に増やして中を掻きまわした。華洞に溜まっていた豊富な愛液がドロリと会陰に流れ落ちた。
しばらくの間指先で温かく湿った、そして指を締め付けて来る極上の内部を堪能した。
指先だけでは叶えられない肉の喜びを待ち焦がれるようにもどかしく身体を震えさせた。
今や巴の女陰からは夥しい樹液が流れ出て股間を濡らしていた。
「お待ちどう様・・それじゃ入れてあげるよ」

バイブの先端を肉洞の入り口に押し当てた。
「これでやっと待ち焦がれていたモノが食い絞められる！義仲様に申し訳ない！あんな大きな物が自分の中に入るのだろうか？早く女の喜びにひたりたい！・・」様々な思いが一機に駆け上がって来て戦慄めいたものを感じた。
太いバイブが不気味に振動しながら細い肉洞を押し広げて入って来る時、目の前には明るい星が飛び交い、ゾクゾクとする快美感が心臓を絞め上げた。
ズブズブと野太いバイブを下腹の中に突き立てながら、「どうだ？良いだろう？」と問い掛けた。
バイブの振動と併せるように下腹をブルブルと震わせながら、何かに憑かれたように首を激しく縦に振り続ける巴が居た。
長いバイブが子宮頚部に当たって侵入が止まった。
暫くバイブの太さと長さを味合わせた後、ゆっくりとバイブを前後に動かし始めた。
その優しい長いストロークに巴の快感は一層昂じて行った。
林もそれに呼応して左右の乳房を優しく責め立て快美の淵に誘った。
興奮で全身を真っ赤に紅潮させ、甘い汗臭を立ち昇らせながら、淫具の前後の動きと併せるようにフーフーと荒い息を吐くようになっていた。
バイブを操作しながら最早この女にはまともな考えは残っておらず、頭の中は性的快感で一杯だろうと想像した。
このまま巴を一機に頂上に押し上げるように責め具の動きを激しくした。
林も調子を併せて乳房を激しく責め立てた。
二人の男から責め立てられハアハアと息継ぎが荒く短くなっていた。ビクビクとする腰の動きのその間隔が短くなって来た。
二人は、この女はもう直ぐイクと感じていた。
最後の追い込みに向かって二人は一層激しく責め上げた。
突然、イッ！というような呻き声を咽の奥から出すと巴の身体が激しく硬直した。
そして、次第に硬直は解け沈み込むように弓反りになった身体が軟化して行った。
最早舌を噛んで死ぬ気も起きないだろうと、巴の口を封じていたボールギャグを取り去った。
「どうだ？イッたのか？」
「はい・・」

目を薄っすらと閉じ顔を横に向けたまま恥じらうように応えた。
その貌には甘美な頂点を迎えた至福の表情が浮かんでいた。
この男勝りの女から溢れるような女の色香が立ち昇るのを感じた。
「どうだ？良かったか？」
「はい・・」
義仲との交合は愛のある交合であったが、若い女体が真から燃え上がるような交合では無かった。
そして、今この謎の二人の男から与えられた交合は愛は無いが、熟れた女体が燃え尽きるような激しい交合であることを思い知らされた。義仲には申し訳ないが、義仲と閨を共にして心は満たされても自分の肉体は満たされていなかった―と、今思い知らされた。
「この二人はこの世のものではない！恐らく天から降りて来た雷神の化身であろう、それならこの二人に身を任せても義仲を裏切ることにはならない・・」と、心の中で都合良く自分の不貞を良い訳した。
今が鎌倉勢との雌雄を決する合戦の最中であることも忘れ果てていた。
そしてもう一度この身がバラバラになるまで、燃え尽きるまであの目眩(めくるめ)く肉欲に浸りたい―と悪魔じみた願望が込み上げて来た。
「それじゃ次にお前の身体を貰うぞ。お前を孕ましてやる」
「はい・・」
この男達がこの世の者で無いならこの身を抱かせても義仲を裏切った事にはならない―と都合良く解釈して男達に従った。肉欲への期待感が高まり股間がジワジワと濡れるのを感じた。
二人は巴の身体を大石から退かせると、クッションシートを河原に敷き直し、その上に裸身を横たえさせた。
まだ両手は背中に高手小手に縛り上げられたままであったが、両脚は自由になっていた。
森は全裸のまま仰向けに横たわる巴の両足首を両手で掴むと思い切り上に引き上げ更に左右に押し広げた。剃毛されて剥き出しとなった可憐な秘園が森の眼前に広がった。
森はギラギラする淫靡な目でその部分に視線を注いだ。
男の熱い視線をその部分に感じ、明るい昼日向(ひるひなた)に男の目に剥き身にされた秘部を晒す羞恥に身悶えた。男勝りの巴なら痩せぎすの森の手を振り解き蹴倒すことは簡単に見えたが抵抗する素振りは伺えなかった。

男の目に秘部を晒す羞恥が逆に不可思議な快美感となって巴の正常な思考を蝕んで行った。

ひぃ！突然巴が悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。
森が両手で巴の脚を掴み全開にしたまま、その中心に顔を押し当てたのだった。
この時代衛生上の理由で男性が女性器を舌で愛撫するという習慣は無かった。
突然の衝撃に巴の目の前に火花が散った。
森は巴の両足首を握り締めたまま顔面を秘園に押し当て、舌を使って愛撫した。
女の性感帯を研究し抜いた丁寧な舌先の動きに巴は声を上げることも出来ずブルブルと身体を震わせた。
肉洞に舌先を差し入れ、ドクドクと溢れ出る花蜜を舁き出した。
生まれて初めて味合わされるクンニリングスの衝撃に巴の目は裏返りオーッ！オーッ！と言葉にならない呻き声を繰り返した。
やがて下腹がブルブルと震え出し、熱いほとぼりをドッと森の顔に浴びせかけるとそのまま絶頂に達してしまった。
「何だ・・またイッたのか・・しょうがないな・・」
巴の愛液に濡れた顔を拭いながら仰向けに倒れ伏す巴の上に身体を預けて行った。
森の男性自身は興奮で最大限硬直していた。
「ああ・・入って来る・・雷神様のモノが入って来る・・」
絶頂を極め薄い意識の底で呻くように口にした。
これまで木曽義仲しか味わったことの無い猛女であり絶世の美女でもある巴の秘奥を自分の分身で堪能した。
甘美な肉の祠に詣でたまま抜き出すことなく何度も体位を変えて楽しんだ。痩せぎすの森であったが、意外にもその部分は太く長かったので突き立てたままの体位変更は容易であった。
流石に変態を自認するだけあって性技に関してはその体力も優れていた。
森に肉洞を捧げたまま、途中何度も巴は昇天した。
森と激しく交接を繰り広げる巴の姿をじっと見つめる林に気付いた。
正常位から姿勢を代え、自分が下になって巴を腹の上に載せたまま、林を手招きした。
女の尻穴に目が無いことを知っていたので、三人で楽しもうという算段であった。
森から手招きされて小躍りするようにやって来た。

深々と森のモノを受け入れる膣孔の僅か上で菊花が柔らかく咲いているのが目に入った。
森からの長い交接により膣の筋肉と繋がる肛門括約筋も柔らかく解(ほぐ)されているのが分った。
女との肛門性交に目が無い林は、ぷっくりと肉を置き、痔や変形の無い綺麗な円を描く、
巴のその部分が美味しそうに映った。
休みなく長時間森から抱かれ続け気息奄々の巴の後口に亀頭の先端を当てがった。
「アアッ！そこは違う！止めて！」
森との長い交接で意識が朦朧としていた巴であったが林の狼藉に完全に意識を取り戻した。
そして、林の狙いを知って巴が悲痛な声を上げた。
侍が戦場で男同士で尻穴を使って慰め合う習慣は知っていたが、女の身で肛門を犯される
など考えるのも汚らわしい屈辱以外の何物でも無かった。
「良いじゃ無いか。三人で楽しもうぜ！」
巴の狼狽ぶりも無視して肛門の中心に先端を押し当てたまま腰にグッと力を込めた。
未体験の激痛に悲鳴を上げ、後ろ手に縛られた手を藻掻かせた。
「やっぱりそのままは無理か？しょうがないな・・」
先端を少し突き入れられただけで身体を離したので、ほっとした表情を浮かべた。
しかし、手に何かを持って再び近寄って来た林の表情にゾッとするものを感じた。
林が手にしていたのは催淫剤入りの潤滑クリームであった。
チューブから指先にたっぷりとクリームを絞り出すと、指を肛口に押し当てた。
そして菊花の皺を一本一本伸ばす様に丹念に塗り込み始めた。
不潔な部分を男の指で撫で廻される不快感に腰を揺すって避けようとしたが、下から差し
込まれた森のイチモツにより動きを封じられた。
クリームが切れると又新たにチューブから絞り出した。
クリームを塗されて巴の肛口はテカテカと光っていた。
最初はひんやりとした感じのクリームであったがジワジワと熱を帯び始めて来るのが分っ
た。それと共にむず痒さも込み上げて来た。
「中にも塗り込んでおかないとな・・」
再び催淫クリームを指先に掬うと、ズブリと菊花の中心を割って腸内に指を差し入れた。
森に膣孔を責め立てられ柔らかく弛緩していた肛門括約筋は大人の指くらいは易々と受け
入れた。
「イヤーッ！」直腸内にまで指を突き立てられ悲鳴を上げた。

「ここにも良く塗り込んでおいてやるぜ・・」と直腸の内壁にマッサージするようにクリームを塗り込んだ。
「おいおい！マッサージするのは良いが俺まで変な気分になって来たぜ！」
膣と直腸を隔てる薄い隔壁を通して、クリームを塗り込む指先に膣内に埋め込まれた森の肉塊を感じ取った。
薄い革一枚を隔てて、森の肉茎の表面をなぞるようにクリームを塗り込んだ。
「さあ、尻の穴が熱く火照って来ろう？痒くって仕方ないんじゃないか？今これで掻きまわしてやるからな！」
と、股の間から淫茎を隆々と屹立させながら再び巴に迫った。
「ああ・・熱い・・痒い・・許して・・」
明らかに身体の変調に気付いていたが、肛門で男のモノを受け入れる屈辱に耐えられぬよう拒絶するよう腰を振った。
そんな巴の拒絶を封じるようにしたから森が豊かに張った巴の尻を支え、両手で尻たぶを割った。
明るい日の光の中でセピア色の肛口が剥き出しとなった。
喜び勇んだ林が再び先端を押し当てた。
潤滑クリームは塗られていたが、初めての肛門性交で更に前の孔は別の男に占有されている状況では挿入は容易でなかった。
「ふう・・きついぜ・・」
腰に力を込め亀頭部分が半分ほど埋没していた。しかし、その後の鰓の張った最も太くなる部分の通過は容易では無かった。
巴は前の穴を森に貫通されている状況で更に後ろの孔も抉られようとしている状況に最早悲鳴を上げることも出来ず歯をカチカチと噛み鳴らして耐えていた。
激痛に汗が滲み出て、下に横たわる森の身体の上にポタポタと滴らせていた。
「後少しだ！」
激痛に苦悶する巴の肛門が最大限に開いて、最も太くなる部分を受け入れようとしていた。
「おお！入ったぞ！」
林が歓声を上げた。
最難関を通過して後は力のままにズルッと根元まで腸内に埋め込まれた。
二本の男のモノが体内に埋め込まれた事を感じて悲鳴を上げて身体を悶えさせた。

二人の男に前後からサンドウィッチにされ悶え狂った。
そんな巴の様子を観察しながら上下からピストン運動を繰り返し、何度も絶頂に追い上げた。
この時代まだサドとかマゾの概念は無かったが、巴は男達から虐待を受ければ受けるほど、不可思議な被虐の情念が燃え上がって行くのを感じ始めていた。
男二人から受ける被虐の苦痛が早く終われば良いと思うのと同時に、この虐待が自分の心臓が止まるまで続いて欲しいと念じる心が勝り始めていた。

完全にマゾヒズムの虜となって抵抗の意志も失い、自ら被虐の淵に身を投じてしまった巴は、今は緊縛も解かれ、胡坐をかく森の上に後ろ向きとなって腰を預け、肛門を使わせていた。
人並外れたモノで尻穴を貫きながら、後ろから両手を前に廻し豊かな乳房をユサユサと揉み上げていた。
両手の自由を取り戻した巴は、更に強い快美感を得ようと、開け放たれた自らの股間に指を伸ばし、ピチャピチャと音をさせて秘園を掻きまわしていた。
時折、森は巴の顎に手を掛け自分の方に振り向かせると、その唇を奪った。
互いの舌を絡め合う、その長くて濃密な口吻は愛する男女を感じさせた。
林が服の間からイチモツを取り出し、巴の前に突き出した。
この時代フェラチオの習慣は無く、森とのアナルセックスの快感に浸り呆けた表情を浮かべていた巴は、しばらくの間不思議なモノを見るようにボーッと見詰めていたが、自然の動作で舌を伸ばし、林の差し出したモノに愛撫を加え始めた。
本能的にそうすれば男が喜ぶのだろうと感じたのか、自由な両手で林のモノを捧げ持ち、亀頭部をなぞり、垂れ袋を優しく揉み始めた。
「そうだ！良いぞ！舌先で裏筋も嘗めるのだ！」
絶世の美女の女武将の絶妙なサービスを受けながら逐一指示した。
「口を開けて俺のモノを口の中で洗うのだ！」
肉茎を根元まで口内に突き立てられ、息が詰まり目を白黒させる巴であったが、得体の知れぬ甘美な情念に突き動かされ、激しく舌先を動かし林のモノを揉み上げた。
初めてとは思えぬ巴の濃密な口技を受けて、流石の林もウーンと唸った。

この女は生まれつき娼婦の才能があると思った。
巴の絶妙な口技に接して、抑えも効かず腰をビクビクと痙攣させると口の中に放出した。
「俺の精を残らず飲み下すのだ！」
フェラチオの無い時代で、当然口内射精も飲精も無い時代であったが、巴は喉を上下させて口の中に溜まった精液を必死になって飲み下した。
「そうだ！尿道に残った精液も吸い上げるのだ！」
林に命じられた通りに頬を窄めて必死に吸い取り、後始末を完了させた。
林のモノを離し、プハッと息をした口の端から白い液が滴っていた。
後ろからその様子を見ていた森も巴の妖艶な姿に魅せられたように腸内に大量の精液を放出した。
しかし、若い男の硬化した肉塊が腸内で萎える事は無かった。

その頃、乱戦の中で遊軍と化した義仲の兵が偶然そこに辿り着いていた。
目の前で素っ裸に剥かれ尻を犯されながら、口で男のモノを咥える巴の姿に肝を潰した。
「アアッ！巴様じゃ！」
「お労しや！何と哀れなお姿じゃ！」
呆然として身動きも出来ず暫しその姿を見守ったが、誰かが「巴様をお救いするのじゃ！」と声を上げると金縛りが解けたように、巴を救出しようと一斉に動き出した。
その様子に気付いた林が、「おいおい！大変な事になって来たぜ！」と、怯えた声を上げた。
林の狼狽ぶりを無視して森は悠然と巴とのアナルセックスに浸っていた。
巴もふと義仲の兵がこちらに向かって来る様子が目に入り、明るい陽光の中で全裸のまま男と浅ましい交合をしていた恥ずかしい姿を日頃見知っている配下の侍に見られたという衝撃が巴を打ちのめした。
引き攣った悲鳴を上げ、貌はすっかり蒼褪め、必死に自由な両手で胸と股間を隠そうとした。

雄叫びを上げて侍の一群がこちらに向かって来ていた。
「おいおい！早く逃げないと命が無いぜ！」林が悲鳴の様な声を上げた。
義仲の一群は 10 メートルと離れていない所まで迫っていた。

「大丈夫だって・・」
狼狽える林を醒めた目で見返した。
敵は既に５メートルと離れていない所まで来ていた。
後コンマ数秒の内には、彼らが雪崩れ込んで来て自分の首は舁き取られてしまう・・こんな所に来るんじゃなかった！ーと後悔の念が浮かんだ。
所が後僅かに迫っているのに、彼らが攻め込んで来る様子が無かった。
敵が脚を止めた訳では無い！彼らは必死になって全速でこちらに向かっている様子が見えた。
「おい！一体どうなっているんだ？」
「その答えは、だな・・」
森が勿体ぶった言い方で答えた。
「我々は今、異次元空間に居る・・現実の三次元空間に四次元空間を作るため次元を一つ借りて来ている・・そのため境界部分では二次元状態となっている・・二次元、すなわち奥行きの無い平面だ。まるで映画のスクリーンの様にいくらアイツらが攻め寄せて来てもスクリーンから飛び出してくることは出来ない。中心から半径５メートル程の領域に境界部分が出来ている。姿や声は届くが彼らが永久に此処に到達することは出来ない。必死に駆け寄る彼らには判って無いだろうけど、無駄な努力に過ぎない。
森に後ろから尻穴を貫かれている巴には理解することも理解する余裕も無かっただろうけど、自分には何となく理解出来た。
ただ必死に駆け寄ろうとする義仲の軍勢の目の前で、巴を存分にいたぶることにが出来ることが分かってサディスティックな情念が込み上げていた。
後ろから森に抱かれる巴も目の前に迫りながらも何時までもやって来ない味方の軍勢を不思議な物を見る様な目で見詰めていた。
これは現実(うつつ)の世界ではなく夢幻の世界なのでは無いかと思い始めた。
夢幻の世界なら自分がどんな恥ずかしい姿を手下の前で晒しても恥ずかしいことは無い―と、思い始めていた。
そして、背後から抉る男のモノが目眩く甘美な世界に再び誘うのを感じていた・・
潤んだ目で後ろを振り向き森の唇を求めた。
森も巴の唇に自分の唇を重ねた。
背後から伸ばした手が、日頃見知っている手下達の前で痴態を晒すことに興奮して、固く

勃起した乳首を転がした。
この頃木曽勢の一群もどんなに駆けても一向に距離が縮まらない現実に異変を感じ、速度を緩めていた。
その目の前で、我等が仰ぎ見る女大将が身に一筋の衣も着けず謎の男と睦まじく唇を交わす姿に呆然とした。
どっかりと胡坐を組んで巴を載せ上げていた森が一つに繋がったまま立ち上がった。
森に背後から突き立てられるままふら付く腰つきで境界まで歩み寄った。
「おい、境界まで寄ったらどうなるんだ？」
林が不安げに尋ねた。
「向こうから見てもこちらは映画のスクリーンの様に二次元状態にしか見えない。紙と紙を重ね合わせても文字が移らないように、指を伸ばせば届く距離でも互いに触れ合う事は出来ない・・」
背後から乳房を揉みしだき、肛孔を貫いたまま、唖然と立ち竦む木曽勢の前まで連れて行った。
まさに指を伸ばせば届く距離であった。
「アアーッ！巴様！」
直ぐ眼前に男から犯される巴の姿を見て悲痛な叫びが上がった。
手を伸ばせば届く距離なのに、手も足も出せない現実を思い知らされた。
日頃見知っている配下の武将や侍から恥ずかしい姿を見られている事に羞恥を超越した摩訶不思議な陶酔感を覚えた。
蜜壷から溢れ出たサラサラとした樹液が大腿を流れ落ちて行くのが後ろから身体を密着させる森にも分った。
「巴、お前の本当の姿を手下達に見せてやったらどうだ・・」
「はい・・」
巴は自由な両手を自分の股の付け根に持って行った。
「見て・・見て・・巴のいやらしい雌の穴を見て・・」
両手の指先を使って、綺麗に剃毛された童女の様な柔肉を左右に押し広げ、濡れそぼった秘園を露わにした。
男達は息をするのも忘れ、血走った目でその部分を凝視した。
男達の熱い視線がそこに集中するのを感じ巴の情念が一層<ruby>舁<rt>か</rt></ruby>き立てられた。

「アアーッ！良いわ！・・・巴は本当はこんなにイヤらしい女だったのよ！」
両手の指を雌穴に突き立てピチャピチャと音を立てて淫液を掻い出した。
その様子を男達は唖然とする目で見守った。
中には良く見ようと腰を屈めて下から見上げる男もいた。
巴の両大腿を抱えた森が、男達に見せ付けるように巴の背を胸に載せたまま反り返った。
逆駅弁体位と言っても良い状態になり、森の肉塊が深々と巴のケツメドを貫いている様子も、巴が自らの指で陰孔を愛撫する様子もありありと映った。
目の前の巴の裸身に手を触れようと無意識に手を伸ばす男も居たが、決して触れることは出来なかった。
巴が首を振って森の唇を求めた。
森も巴を抱え上げたまま唇を重ねた。
肛門性交をしながら自ら前の穴を自慰し、仲睦まじく接吻する巴の姿を唖然として眺め続けた。

「さて、本日最大のお楽しみと行こうか・・」
衆人環視の中で、林が 500cc 容量の巨大なガラス浣腸器を手にはしゃいだ声を上げた。
グリセリンの瓶から出した原液をペットボトルの水で希釈して浣腸液を調合した。
見守る木曽勢もそれが何かは判らなかったが、何か淫靡な準備であることは理解出来た。
「巴、そこに四つん這いになるのだ」
無言で言われるままに河原の上に犬の様に四つん這いの姿勢をとった。
「尻をもっと上に上げるのだ」
「はい・・」
森に命じられるままに屈辱の姿勢をとった。
長時間に渡って林と森から交互に突き立てられていたアヌスは完全に閉じることは忘れ、少し開いたまま赤黒い内部の様子を差し込む日の光に晒していた。
ガバッと尻たぶを押し分け、そこの様子を観察していた森は、肉の丘の谷間にいじらしく咲く一輪の菊花に魅せられたように顔を押し付け、その中心部を舌先で愛撫した。
突然の肛孔への舌先の攻撃を受け、河原の石に顔を擦り付けたまま悲鳴の様な声を上げてビクビクと身悶えた。
腸内を舌先で掻きまわす森の舌先には独特の香りと味覚が襲ったが、逆にエロスの情念を

高めることとなった。
「ああ・・巴様・・」
「お労しや・・」
犬の様に河原に四つん這いになったまま、まるで獣のように尻穴を嘗め回される巴の姿を凝視して悲痛な声を上げた。
彼らは自分では気づいていなかったが、股間のモノは痛いほど屹立し、中には無意識の内に取り出して擦り始める者もいた。

「それじゃ始めようか」
林が 500cc 容量のガラス浣腸器に浣腸液を満々と満たして歩み寄った。
巨大な硝子浣腸器の嘴管が巴の菊花の中心に突き立てられた。
二人の現代から来た変態男に責められたアヌスは抵抗なく太い嘴管を呑み込んだ。
これから何が始まるのか全く分からず、ただ被虐の情念のまま尻を突き出していた巴であった。
最初、嘴管を突き立てられた時は男達の巨大な淫茎と比べると、はるかに小さく奇妙な異物感を感じるだけであったが、次に冷たい水が腸内に流れ込んで来た時、得体の知れない恐怖を感じて手を握り締めた。
「さて、一本目終了」
ポンと音をさせて嘴管を引き抜いた。
薄めたグリセリン液であったので直ぐには腸は活動を始めず、なにやら重苦しい膨満感だけが下腹に残った。
「そら、二本目だ」
再び突き立てられた嘴管から冷たい水が流れ込んだ。
まだ腹に痛みは感じなかったが、腸が内部から膨れて行くのを感じた。
二本目を空にすると早速三本目の浣腸器に液を吸い上げた。
「そら、三本目だ」
嘴管を菊花の中心に突き立てると、シリンダーを押し込み始めた。
まだ腹に異変を感じていなかったが、重苦しい違和感が腹全体を覆うように感じて、「もうお許しください・・」と、浣腸液を注ぎ込まれながら哀願した。
「何を言ってる。若い女ならこんなモノ２リットルでも３リットルでも平気なはずだ」

と、シレッと返した。
「そら、四本目だ」
都合２リットルの浣腸液を注ぎ込まれて、腹がパンパンに張るような感じがした。
心臓がドクドクと脈打ち脂汗が滲み出ていた。
「ほら！五本目行くぞ！」
身悶える巴の姿をサディスティックな目で見詰めながら更に浣腸器を突き立てた。
限界まで膨張した大腸が悲鳴を上げ、更なる浣腸液の流入に抵抗した。
急に重くなったピストンの動きに気が付いた林は更に力を込めて押し込んだ。
「ああー！もう！」
腹が内部から裂けるような圧力を感じて、悲鳴を上げた。
巴の腹圧とピストンを押す男の腕力の勝負となっていた。
残り 50cc ほどになった所で、嘴管と肛孔の隙間から激しく浣腸液が噴き出した。
「やれやれ 2400cc て、所か・・しょうがないケツだな・・」
残忍な薄ら笑いを浮かべて嘴管を引き抜き、高く擡げた尻をパンパンと叩いた。

「ああ・・」
突然巴が苦悶の表情を浮かべた。
腸内に注ぎ込まれたグリセリンがその残酷な効果を発揮し始めたのだった。
「ふふ・・効き始めたようだな・・ただ、直ぐに出しては面白くない・・もう少し楽しんで貰おうか・・」
最初は重苦しい違和感に過ぎなかったものが次第に腸全体を掻き毟る苦痛に代わって行った。
河原に四つん這いの姿勢をとったまま脂汗を流し強烈な腹痛と闘っていた。
最初は腹を掻き毟る腹痛であったが、次第にそれは排泄を求める強いうねりとなって行くのが分った。男達から注ぎ込まれた水が今や濁流となって出口に殺到していることを思い知らされた。。
腹の中の物を出してしまえばこの苦痛から逃れられると感じたが、武家の頂点に君臨する女武将としてのプライドが男達の見守る前で排泄するという汚辱を許さなかった。

「これはさつきお前が楽しんだバイブだ・・」

巴に死ぬほどの屈辱とかつて経験した事の無い快感に誘った白いバイブレーターを見せつけた。
「そして、これはお前の尻穴に栓をするバイブだ・・」
少し小振りの黒いバイブレーターを手にして見せつけた。
腹を襲う激しい痛みに苛まれながら、ブルブルと命あるものの様に震える白と黒のバイブレーターを不気味な物を見るように見つめた。
出口を求めて浣腸液とそれに溶かされた腸内汚物が殺到する肛口にズブズブと黒いバイブを埋め込んだ。
その大きさと不気味な刺激に河原の石に顔を擦り付けたまま泣き叫んだ。
黒いバイブレーターを根元まで押し込むと次に白いバイブレーターを淫孔にあてがった。

境界の外から見守る木曽衆は呆然とその様子を見守っていた。
股間が自ら噴き出したモノで濡れているのも気付かなかった。
その時、木曽勢の残党狩りをする鎌倉勢の和田義盛が配下を引き連れて出現した。
「やや！あれは木曽義仲の愛妾の巴御前ではないか！？」と、大声を上げ、次に異常な状況に目を疑った。
僅かばかりの木曽勢の見守る中で、得体の知れない二人の男から素っ裸にされ狼藉を受ける巴御前？
状況は全く理解不能であったが、コイツらを蹴散らして巴を生け捕りにするのは、赤子の手を捻るようなもんだ―と、突然の僥倖に小躍りした。
「それ、義仲の首級は上げたぞ！次は巴を生け捕りにして鎌倉への手土産とするのじゃ！」と、配下の軍勢に大声で呼ばわった。
巴の災難を固唾を呑んで見守っていた木曽勢であったが、突然の和田義盛の出現に現実に引き戻された。
そして、義盛が大音声で発するように、このまま巴を生け捕りにされては、武士の面目が立たないと得物を手に和田勢に襲い掛かった。
突然の鎌倉勢と木曽勢の戦いが始まったが、森も林も自分には関係ない事ーと平然と巴を責め続けた。
巴にしても激烈に腸を責め苛む苦痛と林が操作する二つのバイブの妖しい刺激に、一体今何が起きているのか理解する理性は完全に喪失していた。

前後の二つの穴に突き立てられたバイブはグルグルと蠢き巴の苦悶を一層促進していた。
「ほら！咥えるんだ！」
巴の長い後ろ髪を掴んだ森が股間から突き出した淫茎を巴の目の前に見せ付けた。
自分で能動的に動いていなければ、直ぐにでも落下無残な醜態を晒してしまいそうだと分っていた巴は、目の前に突き出された隆々とした肉塊に縋るように武者ぶりついた。
「そうだ、お前もおしゃぶりが随分と上手になって来たな・・」
脂汗を流し、苦悶しながら必死にしゃぶり上げる巴を面白そうに揶揄った。
一方林は巴の苦悶を一層大きくするように、尻からまるで角の様に突き出した白と黒のバイブを操った。

境界の外での木曽勢と鎌倉勢の戦いは鎌倉勢の圧勝であった。
木曽勢も死力を尽くして奮戦したが、多勢に無勢、戦勝の勢いに乗る義盛の軍が一方的に蹴散らしてしまった。
巴を生け捕りにせんと、近寄ろうとするがやはり境界に阻まれ何としても近づくことが出来なかった。
幾ら歩を進めても、ちっとも近寄ることが出来ない状況に困惑していた。

巴の必死の口技によりゴール間近まで追い上げられていた森は異変に気付いた。
映画のスクリーンの様な境界が突然乱れ始めて、テレビの画像が歪むようにピッピッと歪始めた。
そして、何やら奇妙な波動を肌に感じるようになった。
「拙いな林！異次元空間を維持するのも限界に来たようだ！帰るぞ！」
「チェ！折角良い処で！」
巴の尻を責めながら残念そうに舌打ちをした。
巴の口から硬直した肉塊を引き抜いた。
途中でお預けをくらったように巴が残念な表情を浮かべた。
引き抜いた男根から夥しい精液を噴き出して、巴の顔に吹きかけた。
ネバネバする白い精液を顔面一杯に受け、巴の顔に至福の表情が浮んだ。

二人の姿が陽炎の様に薄くなって行った。

それと同時に境界が崩壊し始め、和田義盛を先頭に鎌倉勢が巴の下に殺到した。
「これは、これは、巴殿。何とも人前に晒すことが出来ないようなお姿では無いか。
四つん這いの姿勢をとる巴の尻の前にどかっと腰を降ろした義盛が淫猥な笑い声を発した。
義盛の発する言葉は巴の羞恥をかき揚げたが、少しでも気を緩めれば、すぐにでも暴発してしまいそうな状況に苦痛で尻を痙攣させながら同じ姿勢を取り続けるしか無かった。
「これは巴殿のお気に入りの嫁入り道具で御座るか？いやいや何とも卑猥な形をしておりますな！」
白いバイブを音をさせて抜き取り愛液に濡れる淫具を繁々と見つめた。
「おやおや？オ[redacted]だけではなく、こんな所にも・・」
浣腸などの知識も無く、脂汗を流し尻を痙攣させている巴の苦悶の原因が排泄を耐えている事も知らぬ義盛は、肛口の皺を精一杯伸ばして食い込む黒いバイブに手を掛けた。
それを引き抜かれたらどんな恐ろしい事が起きるか巴には判っていたが、身を揺すっても声を上げても暴発しそうな苦悶の中で声にする事は出来なかった。
「おお・・中々固く御座るな・・」
肛門括約筋の全力を尽くして食い絞める淫具に難渋しながらも、力を込めて引き抜いた。
その瞬間、開ききった肛孔からドロドロに溶けた便塊の混じった夥しい汚水が噴き出し、義盛の顔を襲った。

薄れゆく景色の中でその状況を見ていた林が「なあ、この後どうなるんだ？」と、森に尋ねた。
「武士の面体（めんてい）に糞を浴びせかけられた和田義盛は激怒して、巴を鎌倉の自分の屋敷に連れ帰り、その恨みを晴らすために、一生性奴隷として飼い続けることになるのさ・・まあ、巴も心の奥底に秘められていた被虐願望を呼び覚まされ、マゾの喜びを知るようになったし、性奴隷に墜ちて毎日虐待を受ける方が幸せかも知れんな・・」
「おい、それは本当の歴史か？」
自分達が過去に遡ってその後の歴史を変えてしまったのでは無いかと心配そうに尋ねた。
「なあに、歴史なんざ後の人間が自分の都合の良いように適当に解釈したもんだから、何も問題は無いさ・・」